

外出自粛

津木林洋

コロナのせいで、外出を極力控えている。特に、対面での会合は余程のことがない限りお断りしている。いくつかの同人誌から、新しい号が出たので合評会に参加して欲しいという依頼が来て、オンラインなら参加する旨を伝えると、オンラインとの併用は難しいので、残念ですがという返事が来た。「せる」の例もこのところオンラインを併用しているが、会場と端末を使って結ぶのは、意外と難しい。会場だけ、あるいはオンラインだけ、にする方が運営は楽だ。ただ、オンラインはある程度、機器に精通した者がいないと、始めるのにハードルがある。一旦始めてしまえば、大して難しく

はないのだが。

外に出ることは滅多にないといっても、夕方のウォーキングは人と密にならないので、ほぼ毎日行っている。淀川の川縁なので気持ちがいい。ムクドリやハト、カラスに混じって、時折キジが姿を見せる。草木の移ろいもあって、もし、ウォーキングができれば結構ストレスが溜まるだろうとは思っている。日本はまだ爆発的な感染状況にないもので、感染する確率は低いとは思うものの、万が一感染した場合、重症化の可能性の高い高齢者に属している身としては、用心するに越したことはないというのが偽らざるところである。感染したら、十発中一発が実弾であるロシアンルーレットをしなければならぬような感覚。若ければ十発か一万発に一発くらいは感覚だろうなと思う。こんなふうに我慢できるのは、こ

の状況がいつかは終わると思っ
ているからだ。治療法が確立し、ワクチンができて、コロナがインフルエンザと同じくらいの死亡率になれば、コロナ以前の生活に戻るだろう。それはいつ頃になるのか。年内にはワクチンができそう、などという話を聞くが、ノーベル賞を取った某先生に言わせると、それは楽観的すぎるらしい。普通五年から十年はかかるものが、いくら金をつぎ込んでも半年やそこらでできるわけではない、と鼻で笑う姿を見た。

もし、治療薬もワクチンもできなければ……。その時は、ロシアンルーレットの引き金を引く覚悟を決めて、外に出て行くだろう。ただし、マスクは忘れずに。

コロナ禍が終息しない今の状況において、現代小説を書くのは難しいと感じている。大阪文学学校の私

のクラス（Zoom）によるオンライン）では、コロナを背景にした作品は未だ出てきていない。コロナ以前のものばかり。中には、わざわざ西暦年を入れて、それを明示するものもある。テレビ番組で、「これは二〇一九年十月に撮影しました」などというテロップが流れるのと同じだ。

なぜ難しいのか。おそらく、コロナを背景にしても、それを生かした作品が作りにくいからだろう。人と人が会うのが難しいという状況は使えても、それはコロナの上っ面を撫でていただけで、もっと深いところまで手を届かせるにはどうしたらいいのか、考えあぐねてしまう。私も一つの作品のアイデアを思いついたが、単に状況を使っているだけという気がして、ボツにしてしまった。

となると、現代を舞台にせず、過去を舞台にしたらいい、ということになる。幸い歴史小説を書いたこと

があるので、コロナが終息するまでそちらで遊ぼうかという気持ちもある。大正時代の大阪を舞台にした作品のアイデアがあるので、それに取り掛かるうか、あるいは書き慣れた江戸時代を舞台にしようか、などと思いを巡らしているが、なかなか踏み切りがつかない。書くのならやはり今でしょ、今のコロナを書くのが筋でしょ、という思いが消えないのである。

こんなふうにくろくろしている間にコロナが終息してしまい、あれは何だったのかと首をひねることもなにかねない。それはそれで書けるかもしれないが。